

# キャンプ体験が児童の自己表現力に及ぼす影響

段畑 智大 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 黒澤 毅

キーワード：キャンプ，児童，自己表現力

## 1. 緒言

現代の児童の生活は、科学技術の発達、高度な情報化など、社会の変化により大きく変化している。そんな中、他者との関わり不足により、自己表現力の不足が問題となっている。本田<sup>1)</sup>は、人間関係を形成するために必要な要素の一つに自己表現力をあげている。また、自己表現力とは「自分がしたいことや考えていることを適切に表現する力」<sup>1)</sup>と述べている。他者と情報や感情を共有しようとするのである。一方、キャンプは様々な動機づけにより自己決定する場面や自己を見つめ直す機会が多く、子どもの発達課題に沿った自己が形成され、自己表現力が向上すると考える。

そこで本研究は、キャンプ体験が児童の自己表現力に及ぼす影響、およびその要因となったキャンプ中の体験について検討することを目的とする。

## 2. 研究方法

【調査対象】平成28年8月24～8月27日(3泊4日)に行われた、Y国際自然学校、信州サマーキャンプに参加した小学1年生から5年生29名のうち、小学4,5年生の14名(男3名 女11名)の児童を調査の対象とした。

【調査方法】玉瀬<sup>2)</sup>が作成した「自己表現力尺度」2因子、14項目で構成されたアンケートを用いてキャンプ体験前(pre)、体験後(post)、一ヶ月後(post1)の計3回実施した。また筆者が独自に作成した「ふりかえりシート」を1日のプログラム終了後に児童、リーダーそれぞれに記入してもらった。調査時期を表1に示した。

表1 調査時期

	キャンプ前	1日目	2日目	3日目	4日目	キャンプ後	キャンプ1ヶ月後
自己表現力尺度	0					0	0
ふりかえりシート(児童)		0	0	0	0		
ふりかえりシート(リーダー)		0	0	0	0		

## 3. 結果および考察

児童の自己表現力得点の変化をみるために、調査時期を要因とする1要因の分散分析を行った結果、pre-post間で有意に向上していた。またその効果はpost-post1間で維持されていた(表2)。

キャンプではカレー作り大会や登山など参加者が積極的、主体的に取り組むプログラムであ

った。普段の生活とは異なる、非日常的な生活を行うことで、参加者1人1人が自己と向き合い、仲間と協力していく過程で、自己の考えを持つことができたと考え。また、記述からキャンプ前では「友達を作りたい」、「協力してプログラムに取り組む」などの不安を感じさせる児童がみられたが、天候にも恵まれプログラムの変更もなく、キャンプをスムーズに行うことができたことも、自己表現力の向上へ関与していると考え。

また因子別得点の変化をみるために、調査時期を要因とする1要因の分散分析を行った結果、関係形成因子はpre-post間で有意に向上したが、説得交渉因子に変化はみられなかった(表2)。玉瀬<sup>2)</sup>は関係形成因子が十分にできるようになった後に説得交渉因子ができる能力が習得されると指摘している。3泊4日のキャンプであったため、キャンプ体験における葛藤的な場面において相手を説得したり、交渉したり、やや攻撃的に相手にかかわる場面が少なかったと考える。

表2 自己表現力得点の平均値、標準偏差とF値

N=14		pre	post	post1	F値
自己表現力	M	39.14	42.85	42.00	7.39*
	SD	7.12	6.09	6.42	
関係形成因子	M	25.57	28.00	27.50	5.79*
	SD	5.61	4.62	4.57	
説得交渉因子	M	13.57	14.85	14.50	3.14
	SD	2.70	2.95	2.73	

\*p<.05

## 4. まとめ

キャンプを体験した児童の自己表現力は向上した。またその効果は一ヶ月後も維持することが分かった。説得交渉因子を含め、より自己表現力が向上するためには、キャンププログラムの工夫や班構成、リーダーとの関わりが必要であると考えられる。

引用・参考文献

- 1) 本田 恵子(2007)：自己表現増加のための集団SSTが自動に及ぼす効果、早稲田大学、教育学研究科、p.38.
- 2) 玉瀬 耕治・越智 敏洋・才能 千景・石川 昌代(2001)：青少年アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討、奈良教育大学紀要、第50巻、1号、p.221-23.